「プロジェクト・スペクトラム」に関する考察(II)

—幼児教育の学習カリキュラムと評価—

○真宮美奈子 山内紀幸 山内淳子
(山梨学院短期大学)

V プロジェクト・スペクトラムの学習評価

1. それぞれの知能に公正な文脈評価

「プロジェクト・スペクトラム」教育実践の評価方法には、以下の2つの特色がある。

まず、「文脈の中での評価」(assessment in context)を行うことである。別稿でみたように、彼らは、7つの「ドメイン」として活動領域を設定し、その中における学習評価の指標となる「キイ・アビリティ」を整理していった。その視点を参考に、幼小期の子どもの能力をそれぞれの知能として公平に(intelligence-fair)捉えるための評価法を考案した。それぞれのドメインの特性に合わせ、子どもの活動の文脈を評価するために、チェックシート、観察記録、芸術ポートフォリオ、写真、文字サンプル、インタビューなどが組み合わされていった。

例えば、言語ドメインにおける「物語をつくる」という「キイ・アビリティ」の評価は、木の葉、建物、生き物、プロップ(王様、竜、宝石箱)などを備えたストーリーボードを用いて行う(Krechevsky 1998 :39-52)。子どもたちは、それを使って物語を話す。観察記録を担当する教師は、語彙や文の構造の複雑さ、ナレーションや対話の利用、主題の首尾一貫性、そして表現力を含んだ言語技能の範囲などを物語記述シートやチェックシートに記録する。この観察記録は、年間を通して何度も取り出され、子どもの言語的知能が如何に変化していったかを評価するためのサンプルにされる。

2. 子どもを励ますための評価

プロジェクト・スペクトラムのこうした評価は、子どもの自尊心を向上させるために用いるべきであり、「何ができないかを評価する多くのアセスメントとは違い、スペクトラムは、それぞれの子どもたちがもつそれぞれの知力を識別し、それを祝うことに力点を置いている」(Chen 1998a : 42)という。

ガードナーによれば、人はだれでも優れた一つかそれ以上の知能を持っている。子どもたちも同様に、自分自身の他の知能よりも、あるいは同世代の子どもたちよりも、少なくとも一つ以上の優れたある知能や能力をもっている。しかし、それらの知能は、可視できないものとしてベテラン教師の主観的な解釈の中だけに留まるか、

あるいは積極的な評価項目からは除外されてきた。しかし、「教師が7つの知能に留意しているとき、教室での子どもたちの地位はがらりと変わる」(Chen 1998a : 43)。それぞれの知能(=ドメインにおけるキイ・アビリティ)に公正な評価方法をつかって、子どもの活動の中でなかなか捉えることができなかった能力を分節化・記号化していく。そして、優れた点をその子どもに伝えていくと同時に、クラスの仲間とも共有できるようにする。結果として、子どもたちは、互いに敬意を払っていくようになる。プロジェクト・スペクトラムの評価は、単一の知能観にもとづく評価方法にはない、このような利点があるという。

VI プロジェクト・スペクトラムの学習活動

1. 子どもの学習を保証する多彩な「エントリー・ポイント」

MI理論は、教育目標となつてはいけない。むしろ先にみたように、可視化されてこなかった子どもの様々なアクチャリティを評価し、さらに豊かな学習活動を構築していくための一つの有効な手段としての理論となつていくべきである。ガードナーは、プロジェクト・スペクトラムをはじめとする多くの教育開発プロジェクトに参加した結論として、こうした見解を主張している(Gardner 1998=1999)。

それぞれに優位な知能をもっている子どもは、それを主要なきっかけとしてあるトピックへと参加していく。だから、教師は、一つの固定的な学習活動を展開するのではなく、様々な能力を使った探索活動が可能となるような教育実践を保証しなければならない。子どもが何かに興味を持ち、学習が深まるとき、それぞれの子ども特有の入り方があるはずである。とするならば、学習カリキュラムは、様々なエントリー・ポイント(entry point : 入口)が準備されたものとして構成されなくてはならない。ガードナーは、物語的、量的・数学的、論理的、根本的、美学的、体験的、社会的の7つのエントリー・ポイントを提示している(Gardner 1999a :169-172 = 2001 : 240-244)。

教育実践は、様々な形態をとって行われた。例えば、教師が活動の展開の中で、時系列的に複数のエントリー

ポイントを用意する場合、子どもが好きなエントリー・ポイントから学習活動を展開していけるように環境設定する場合などである。後者の象徴的な活動には、「学習センター・アプローチ」(learning center approach)がある(Chan 1998a: 47-69)。教室のコーナーに、「ドメイン」に沿った様々な「学習センター」を設けた。例えば、「音楽」の学習センターでは、パーカッションの楽器、サウンド・シリンダー、テープレコーダー、そしてオーディオテープなどが準備される。「機械と構成」の学習センターでは、木製のテーブル、古いタイプライター、壊れた時計、鉛筆削り、ブロック、積み木などを含んだ様々な種類の道具や機械装置が準備された。活動は、少人数で設定して行う場合もあれば、子どもたちが自由に好きな場所にいて好きな活動を行う場合もあった。

教師の仕事は、「魅力的なモノがいろいろある環境をつくり出し、子どもが知能の分布(spectrum)をできるだけ自然に表示すること」(Gardner 1999a: 137 = 2001: 194)である。また、「教師の主たる関心は、学習活動が一つのカリキュラムに関係するかどうかではなく、すべての子どもにすべての知能をつかっただけの経験を保証することにある」(Chen 1998a: 134)。

2. 学習を展開・深化させていく「ブリッジング」

「エントリー・ポイント」とならんで、プロジェクト・スペクトラムの学習カリキュラムを考えていく際に、重要な概念となるのが、ある能力と他の能力との「ブリッジング」(bridging: 橋渡し)である。

子どもの持っているある優位な能力特性を他の能力へと橋渡しし、さらにある能力をさらに深化させていく「ブリッジング」は、子どもの学習評価を積極的に取り込んでいくことによって、さらに実りある教育実践へと高められていく。

例えば、教師のレイダー・ロスが行った実践がある。読み書きを嫌がる8歳のホセは、人物や小道具使って話をするストリートボード活動であれば、複雑な物語を上手く話すことができた。彼女は、身体的に文字に親しむようにするカリキュラムを構成し、彼の指で絵手紙を書いたり、身体で文字の形をつくったり、物語をもとに踊ったりする実践へと展開していった。こうした言語に関わる能力と身体を使った様々な活動との組み合わせによって、彼はそれまで不得意とされてきた「ドメイン」へと繋がる橋をわたることができた。それ以降、彼は、読み書きに興味をもっていったのである(Chan 1998a: 41)。

VII 結語：幼児教育の学習カリキュラムをと評価を検討するにあたって

1. プロジェクト・スペクトラムの有効な視点

①子どものアクチャリティを捉える多くの説明言語

「エンド・ステイト」との対比によって「ドメイン」の中に設定された「キイ・アビリティ」は、従来捉えられてきた知能観をはるかに超える多くの指標を提供するものである。少し読者がためらうほど明確な31の能力の指標ではあるが、子どものアクチャリティを記号化するための手段として有効なものとなっている。幼児教育において、子どものアクチャリティは、保育臨床の中でベテラン教師の内部において主観的・直感的に感じ取られるものとしてあった。それを記号化し、共有可能な情報とすることで、反省的にその現実を討議できる可能性が生まれたのである。

②子どもの能力を公正にとらえるための文脈評価

プロジェクト・スペクトラムにおける「文脈評価」の方法論は、学習評価という視点を持つことから距離をおいてきた幼児教育の分野にとって、新たな能力評価の可能性を示唆するものである。もちろん、いうまでもなく、「文脈評価」そのものに価値があるわけではない。むしろ、理論と実践と評価が円環構造をもつために、それは必要である。教師が子どもの現実世界における様々な能力をつかむための様々な方法を持てば、その評価が教師の共通の情報ソースとなるだけでなく、さらに多様な教育実践の可能性へと繋がってくる。また、ガードナーがプロジェクト・スペクトラムでの子どもの観察を契機として博物学的知能を追加したように、多くの文脈評価は、実践や評価の理論枠組みそのものをも変更させていくものとなるだろう。

2. プロジェクト・スペクトラムの課題

しかし、同時にこうした子どもの様々ですぐれた知能の分節化作業は、ラベリングという新たな問題も引き起こす可能性がある。

ガードナーは、「あなたは言語的である」とか「あなたは音楽的でない」といった知能の誤ったラベリングを避けるために、(1)どうやって知能を評価するのかを正確に知っている、(2)決定された知能は不変的である、という誤った仮定を持つてはいけないとしている。

「スペクトラムは一つのパッケージではない」(Chan 1998a: 144)といわれるように、「プロジェクト・スペクトラム」は、理論においても、評価方法においても、教育実践においても、未完のプロジェクトであり、絶えず教育実践者の手によって、生成していくものであるということを認識しておくことが重要である。